
Sleeping Princess...

しろつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sleeping Princess...

【Nコード】

N1880Q

【作者名】

しろつき

【あらすじ】

ずっとずっと、小さいころ。

きつとわたしだけが覚えてる、遠い日の思い出。
きつと叶うよね。

いまは祈りをこめて、あなたのことを想うよ。

・プロローグ・

ずっとずっと、小さいころ。

きつとわたしだけが覚えてる、遠い日の思い出。

アルバムのページをめくるように、今でも思い出せるセピア色の記憶。

「ほーらっ、なかないの」

「だってだって。かなちゃんのお花が」

「またつくりなおせばいいんだから」

公園で過ごした時間。

なにも考えず、無邪気に遊んだ。

その時のわたしたちは、目に入る世界がすべてだったから。

「ぼく、かなちゃんとずっといつしよにいるよ」

「ほんとっ?」

「うん!」

「それじゃあ、やくそくしよ!」

「「ゆびきりげーんまん、うそついたらはりせんぼんのーます」」

幼かったわたし達は、叶うはずのない約束をした。

本当は……、

ちよつとくらいは。

かみさまが叶えてくれるんじゃないかって、信じて。

でも駄目みたい。

馬鹿みたいにわたしは信じて、忘れないようにしていた。
けれどあいつはもう覚えてない。

傷つくのが怖いから、自分からは動けなくて、
ずっとずっと言えないまま。

伝えられないまま。

時間だけが過ぎ、本当の想いは心の底でそっと眠ってしまった。

だからわたしは待っている。

王子さまが、起こしに来てくれるのを。

↳ Sleeping Princess . . . ↳ 1 (前書き)

本文です。

・眠る想い

子供のころの約束というものは強いけど脆く、ひどく純粹で、その綺麗すぎるものはどれだけ貴重なんだろう。

なんてことをぼうつとしながら過ごす午後、何を言っているか聞き取れない先生の声を子守唄にしつつ、うつとりとわたしは思っていた。

このまま眠り、授業後の目が覚めたころには、アラビア文字みたいな字で書かれたノートの完成だろう。

いや、「字」なんてかわいらしいもので済むならまだいい。

（ちよつと、何これ。ありえないんだけど）という心の叫びと共に、謎の線が引かれたノートを見つめる姿が簡単に想像できる。

想像し終えて、わたしは思わず離れた席にいる友人を見た。

友人はちゃんとノートと教科書を机の上に広げ、黒板の内容を写しているようだ。

よし、だいじょうぶ。

（次の時間はちゃんと起きてるから、お願いね）という願いを、友人めがけテニスのサーブを打つように勢い良く投げつけた。

投げつけられた相手、今川みゆきは私の視線に気付いたらしく、（え、またなの。ちよつとは努力しなさいよー）という顔でこちらを見返す。

そして諦めたように、はいはいというような顔のあと彼女は黒板に視線を戻した。

まさに親友の仲だからこそ出来る、テレパシーでの会話が成立だ。

みゆきは呆れた顔をしていたけれど、ちゃんと見せてくれるだろう。

これで、あとは眠るだけ。

だったけれど、わたしの目はつついあの中を見つめてしまった。

↳ Sleeping Princess . . . ↳ 2 (前書き)

続きです

目の端に捕らえてしまえば自然と目が行ってしまふ。

意識しなくとも気になつてしまふ、見慣れた男の子の姿。 渡瀬悠一。

わたしと彼、渡瀬悠一との出会いは幼稚園の時代にまでさかのぼる。

わたしの母と悠一の母は仲が良かったことで、よく二人して話していた。

親と一緒に居た子供のわたし達が、その過程で仲が良くなるのはごく自然なことだった。

もともと体を動かすのが好きだったからか、わたしは家で遊ぶよりも外で走り回ったりすることが多かったと思う。

だから外で遊ぶのが好きな彼の家へと行くのは当たり前だった。

しかしその最中、変化は突然として訪れた。

中学校に入った頃だ。

このままの関係が何事もなく続いていくんだろうと、少しの疑問さえ抱かなかったとき。

今までよく二人しているのが多かったせいで、周りから冷やかされることはあったけど、わたしはちつとも気にしていなかった。だというのに彼と、男の子と二人で遊ぶことが気恥ずしいと思えて来るようになったのだ。

『友達』という感情以外はないのだから、恥ずかしいというのも変だけど。

それからは、冷やかされる度に否定をしても、顔にちゃんと書い

てあるよなんて言われる始末。

わたし自身嫌になるのが、もうそれは信じられない位に顔が熱くなってしまうのを分かっていることだ。

なんでそうなるのかと理由を聞かれれば、なぜだろうとしか答えられない。

とにかく、はっきりと言葉にはできないことなのだ。

↳ Sleeping Princess . . . ↳ 3 (前書き)

続きます。

などと考えている内に少しずつだが、眠気は消えかけていた。

「んんー」

ぐぐつと曲がっていた背中をまっすぐに伸ばす。

もうこうなったら、起きていよう。

それでみゆきを驚かせるのも面白そうだ。

七月二日の月曜日。

窓の外は青く澄んだ広い空で、白い絵の具を落としたような雲がいくつも浮いている。

吹き付ける風は気持ちよくて、わたしの前髪をさらさら揺らす。

今日の放課後も変わりなく、習慣化しつつあるやり取りだった。わたしが寝ていて、授業内容をとっていない教科のノートを読みゆきから借りる。

そう、結局のところ、起きていられたのは午前中だけだったのだ。

「いつもゴメンね」

えへへ、なんて笑いながらわたしは今日の分を受け取った。

「そんな。佳奈なんだからしょうがないって」

「ちよ、ちよつとどう意味よ!」

「そのままの意味だけど」

「なっ」

返す言葉が見つからず、口をぱくぱくさせてしまう。

こうして何度もしたやり取りだが、いつもみゆきに口では勝てない。

文句をたったひとこと言うだけで、反撃のしようが無い完璧な攻撃が来る。

何度が負かしてやろうと反抗を考えたこともあるけれど、いざという時に用意した言葉を忘れてしまうのだ。

傍から見た人いわく、まるで大人と子供の口喧嘩だとか。

まあ、その通りなんだけど。

みゆきが大人っぽいのは見た目通りだし、中身もそうだと思う。

ふわふわした栗色の髪に大人びた振る舞い。

言葉使いもちゃんとしている。

だけど、わたしが子供だというのには納得がいかない。

彼女と比べれば見劣るだろうが、負けずに見た目も中身も伴って大人っぽくなったはず。

「ちゃんと写してよね。やってないは無しだから」

「わかってるって」

彼女との付き合いは、入学したての頃に初めて会ったのだから一年ちょっと、だろうか。

すでに長年の友人のように、私のことは全部見透かされている感じがする。

最初の出会いはというと、こんなにも大人びた子がいるんだという興味からだった。

でも見た目とは反対に、話しかけてみれば意外にかわいいところが有るのだ。

もうそこからは興味が大きくなっていて、友達になろうと毎日話しかけたのを覚えている。

自分でもさすがに邪魔過ぎた気がするけれど。

「頑張りなさいよ」

それじゃあね、と手を振ってみゆきは教室から出て行った。

「よし、部活がんばろうって」

わたしは退屈な時間がようやく終わったとばかりに荷物を手に取って、意気揚々と待ち遠しかったテニス部へ向かった。

↳ Sleeping Princess . . . } 4 (前書き)

続きです

テニス部の顧問である近藤先生が出張で居ないため、今週は部活がいつもより一時間ちかく早めに終わっていた。

いつもなら練習をしている時間なのに、先生が戻ってくるまでは部活動が早く終わる。

習慣化していることをしないのは、どこか奇妙な感覚だった。

特に、文化系ならともかく運動系の部活だから体を動かしたくなってしまう。

そんな部活後の帰ろうとした時、あることに気が付いた。

「あれ。無い……」

ラケットをケースに仕舞い込み忘れ物が無いか確認をしていると、今日の分を写すためのノートが見当たらないのだ。

たしか、最後に見たのは教室でみゆきから借りたときだったはず。

その時の記憶を、わたしはもう少したどってみることにした。

借りたノートはすぐに鞆に入れて、自分の分は、

あ！ そうだ。

机の上に鞆を置いたから、ノートは机の中に入れたんだ！

わたしはやつとのことだと思い出すと、ラケットケースと鞆をコートの脇に置いたまま、教室へと向かった。

放課後になり人気の少なくなった校内は、意外と好きだ。

生徒達の声が無い代わりに、校舎の中を吹奏楽部の奏でる様々な音色が大きく響き渡る。

オレンジ色に染まった廊下と相まって、昼間とは全く別の顔を見せてくれるのだ。

まるで、どこか違う世界に迷い込んでしまったかのような錯覚さ

え覚えてしまう。

などと考え歩いている内に、目的の教室の前へと着いていた。
はあ。

学校を出る前に思い出せてよかった。

「あれ？」

誰かがまだ中に残っているんだろうか、教室内から物が落ちたような鈍い音がした。

おかしいな。

人がいるような気配はないんだけど。

↳ Sleeping Princess . . . ↳ 5 (前書き)

続きです

わたしは不思議に思いつつ、扉を開けた。

開けて、部屋の中に一步踏み込もうと足を上げたままの形で、固まった。

「えっ……」

瞳が大きく見開かれる。

目に映ったのは、女の子と男の子とが抱き合っていた光景。見てはいけなйдらう、行為の真っ只中。

鼓動は駆け足に、頭の中がまっしろに塗りつぶされていく。

時間が止まったということが比喩ではないほどの、経験したことのない大きすぎる衝撃に襲われた。

まるでこころの中身は全て流されて、空っぽになってしまったような感覚。

辛うじて頭の中に残っていたのは、驚くくらいに単純な感情だけだった。

嘘でしょ！

嫌だ。

苦しいよ。

それらは始めて知ったもので、わたしにとってはとても大きな感情だった。

今まで知らなかったことが不思議だと思えるほど。

わたしは運良く、無意識の内々に廊下へと隠れることが出来ていた。

それにしても、ああ。

なんて馬鹿なんだろう。

どうして隠れるのよ。

こんなことをしたら逆に部屋へ入りづらくなるっていうのに。

どうにか惚けた頭を全力で使い、現実をしっかりと受け止める準備をする。

冷静になんてなれるはずがないけれど、しなくちゃいけない。

たとえ目の前で起きていた事態が、信じられないほどのことでも。

うつん、信じたくないからこそ。

↳ Sleeping Princess . . . ↳ 6 (前書き)

続きます。

今の状況を確認するため、深呼吸してもう一度さっきのことを思い返す。

「うん・・・うん、大丈夫」

光景を思い返す度、きりきりと胸の奥が強くきつく締め付けられた。

でも今は少しだけ冷静でいられる。

逆行で顔はあまり見えなかったから、何かの間違いだって事もあるし。

さっきは教室の中で、女の子と男の子が抱き合っている。

ように見えた。

だけど重大なのはそこじゃない。

二人のうち片方が知っている顔かもしれない、ということ。

見間違いであって欲しいけど男の子方は裕一、に見えた。

仮に。

仮にも男の子は悠一だったとして、彼と一緒に居る女の子は誰なんだろう。

他のクラスの子の顔をけっこう知っているけど、あんな女の子は知らない。

見たことはないから、同じ学年ではないんだろうか。

「あら。誰かいるの？」

中からした女の声にびくうつと肩が震えた。

もしかしてバレたのかな。

そつと首だけを動かしてドアの方をしてみる。

あつ、やつちゃった。

今更気付いたのだけど、廊下には隠れていても教室のドアは開いたままだった。

これなら、気付かれないほうがおかしいというものだ。
うわぁ、どうしよう。

↳ Sleeping Princess . . . ↳ 7 (前書き)

続きます。

このまま階段を下へ降りていけば、私だとは相手にわからないだろう。

でもそうしたらノートが取りにいけない。

考えている間にも、教室の中からこちらへ近づいてくる音は止まらない。

ごめん、みゆきっ。

声に出さずみゆきに力強く謝ると、私はその場から走って逃げた。

その途中、勢いのあまり階段から落ちそうになったり、手すりに手をぶつけてしまった。

とは言っても、その痛みに気付いたのはわたしが学校の外に出たからのことだ。

そして今までの行動を思い返し、ドアを開けた時点で誰かがいたことに気付かれていただろうと、わたしは気がついた。

そう思った途端、廊下に隠れて安心していた自分が、ちよつと馬鹿に思えてしまった。

その日の夜。

家に帰っても、夕ご飯を食べた後も、わたしはずっと学校で見てしまったことばかりを考えていた。

「くまちいー」

むんずと、くまのぬいぐるみの頭を掴んで抱き寄せる。

これは、わたしだけの誰にも言えない秘密。

自分でも気付かないうちに、悩みがあるときはぬいぐるみを抱きながらというクセがあった。

理由はわからないけれど、抱いていればそれだけで落ち着くから
だと思う。

「・・・・・・・・」

教室にいたのは違う人、だった・・・・・・・・よね。

むぎゆ。

「んー」

いや、でも教室がそうだから優一かも。

むぎゆ。

ダメだ。

頭からはなれない。

なんで優一のこと、こんなに気になるんだろう。

別にあいつとは特別な関係じゃないっていうのに。

「はあ」

一体、わたしはどうしたいの。

むぎゆ。

むぎゆう。

見れば腕の中には、ヘビに締め付けられたかの如く無残な姿のぬ
いぐるみが一体。

茶色のプリーティーなくまが無残な形へと変形していた。

皮肉なカンジに笑った口元と、つぶらな瞳がミスマッチでお世辞
にも可愛くないのがチャームポイントのぬいぐるみ。

ただその見た目も今となっては見てるだけで、

「——ああつ、もう！」

くまちの所為じゃないけど、余計にイライラしてきた。

どうしてわたしがこれだけ悩まなきゃいけないの！ただ教室に
ノートを取りに行ったただけなのに、中ではあんなコトしているし。

↳ Sleeping Princess . . . ↳ 8 (前書)

続きです

「ばかみたい」

誰に言うのでもなく、自然と口から出た。

体育座りで、ぬいぐるみに顔を埋めている今のわたしは傍から見るとどれだけみじめなことだろうか。

タイミングを見計らったかのように、テーブルの上の電話が鳴った。

画面に着信を知らせるメッセージが表示される。

電話はみゆきからだ。

わたしはそのそとくまを抱えたままベッドを移動し、電話を取った。

「・・・・・・・・はい」

「佳奈ー。ノート写すのがんばってる？」

最悪だった。

タイミングが的確なら、電話の内容も的確だった。

「ゴメン。ノートさ、学校に・・・・・・・・置いてきちゃったんだ」

「ふうん」

「ごめんね」

「ねえ、どうかした？」

突然、電話越しに声の雰囲気が変わった。

どこか探りを入れているような声だ。

「・・・・・・・・うん。べつに」

電話越しに聞こえるんじゃないかと言う位に、心臓の音が激しくなる。

ゆきが目の前に居るわけじゃないのに、バレてしまわないかが凄

く怖い。

「そう。どうして隠すの?」

すかさず左手で勢い良く口を押さえる。

驚きの余り、わたしは声を出しそうになったのだ。

「知ってるよ。彼のことでしょう」

「ち、ちがうからっ! 誰が優一のことなんて……………」
くすり、という小さな笑い声がした。
もちろん、電話の向こうから。

「へえ。そう。そうなんだー」

とても嬉しそうな声。

にやにやと笑顔を浮かべるみゆきが、簡単に想像できる。

「ああっ! 違うよ。そう、あいつは」

言いかけて言葉を見つけられなかった。

一体、わたしは何を言おうとしていたんだろう。

「どうせアレでしょ。わたしの優一がーとかそんなカンジ」

「……………それは」

「あら。凶星」

↳ Sleeping Princess . . . ↳ 9 (前書)

続きます。

弁解する言葉もなく、わたしはそのまま黙ってしまった。

「ねえ、いつまでそうしているつもりなの」

するどく嫌なところを突くみゆきの声。

少しの沈黙があったからか、わたしの耳にはとてもよく聞こえた。

「渡瀬君のこと、気になってるんでしょう」

「なつて、ない」

教室の出来事が再びあたまをよぎる。

胸が苦しくなり、とても嫌な感覚がじわじわと全身に広がっていくのを感じた。

「好きなんでしょう」

「違うって言ってるじゃない！」

みゆきの声を掻き消すほどの大声で、わたしは言い返す。

息が切れ切れで、頬が熱い。

『好き』という単語が出たあと、自分でも何を言ったのかさえ分からなかった。

あああ。

もう信じられない。

みゆきに当りちらすなんて、最悪だ。

「ゴメン。つい」

「ふふ。気にしないで」

やさしい声だった。

みゆきのこういうところ、すごく大人なんだなって感じる。わたしだったら、きっと言い返しているだろう。

「まあ、そこまで元気があるなら大丈夫そうね」

「え。あつ」

怒鳴ったおかげで、嫌な気持ちはどこかへ消えていた。

「ねえ。こんなこというのも変だけど、ちゃんと自分に正直になりなよ」

「・・・・・・うん」

わたしだって認めたくなかっただけで、たぶん分かっているんだと思う。

意地を張っているだけなんだろう。

「少し肩の力をぬいてみよう。きっと、楽になるから」

「うん」

きっかけは貰った、だからもう大丈夫。

明日からは前に進んでみようと思う。

「ありがと、みゆき」

そつとみゆきの名前を呼ぶ。

途端に、悩んでたのが嘘みたいに可笑しくなって、くすりとわたしは笑った。

↳ Sleeping Princess . . . ↳ 10 (前書き)

前回からの続きです。

「あれ。おねえちゃんはやいね」

「んー」

妹に適当な返事を返し洗面台にある鏡を、じいっと見つめる。
今日のわたしは、いつもよりも十分ほど早く起きていた。
もちろん昨日得たことを、わたしなりに実行する為だ。

「これじゃ駄目」

後ろで髪を束ねていた、髪留めのゴムをはずす。

ポニーテールから髪が一部ピヨンと飛び出しているのを見つけてしまった。

今日は大事な日なんだから、いつもより気をつけないと。

もう一度毛束をとってゴムを着けると、アメピンでまとめる。

「よし・・・大丈夫」

鏡を見て最後の確認。

ここであまり時間を掛けすぎるのは良くない。

早く起きた意味がなくなってしまうし、次が一番の難関なのだから。

「それじゃあ、行つてきまーす」

わたしは身なりのチェックを終えると家を後にし、いつもの場所へ向かった。

いつもの場所、というのは優一の家のことである。
その場所へ行くのに、なぜ早く起きたかというと、心の準備をするためだった。

毎日行っているのだから、心の準備をするというのも変な話かも

しない。

一回、深く深呼吸。

二回目は浅くゆっくり息を吸う。

今日からは一歩踏み出すと決めたんだ、頑張れわたし。

覚悟を決め、ゆっくり渡瀬家のインターホンを押そうと指が触れた瞬間。

渡瀬家の扉が開く。

「あれ？ 早いね」

突然、優一が出てきた。

その姿を見るなり、胸がトクンと鳴った。

↳ Sleeping Princess . . . ↳ 11 (終) (前書き)

前回の続きです。

そのまま見入ってしまい、ぽかんと口が開いてしまう。

「お、お。おはようっ!」

「おはよう?」

わたしの口から出た信じられない声に、優一は不思議そうな顔をする。

なんだか不審がられているような気がするけど、ここは気にしないでおこう。

「い、行こう!」

「今川は待たないのか」

「みゆきは今日、先に行ってるんだって」

ここまで来れば、あとは一押し。

恥ずかしいことなんてない。

「だから、さ。ふたりだけで行きたい」

言い終えて、わたしはどうしようもなく恥ずかしくなって下を向いてしまった。

きつと今、顔が真っ赤になっているに違いない。

「ん? いいけど」

返事の声を聞くなり、優一のとなりへ並ぶように移動する。

顔の火照りが元に戻るまではこのままでもいいよう。

こんな顔、絶対に見られたくない。

「もしかして、お腹痛い?」

「え?」

耳を疑うような言葉が聞こえた。

いや、きつとわたしの聞き間違いだ。

「下ばかり向いてるし、なんだか今日はおかしいぞ」

前言撤回、聞き間違いなんかじゃなかった。

「——力、なんだから」

ちよつとここで話しておこう。

わたしは眠り姫——、眠れる森の美女といわれる話が好きだ。

城に眠るお姫さまを王子様が助けに来るといってお話。

もし、その眠り姫のお話が、こんな風だったら面白いんじゃないだろうか。

お姫さまは城の中で深く眠り、長い間じつと王子さまを待っていた。

しかしいつまで経っても、お姫さまを起こす王子さまは来てくれない。

そこで、お姫さまは自分で起きれないかと頑張ってみる。

すると呆気ないほど簡単に、眠りから覚めることが出来てしまった。

そして自分を迎えに来てくれなかった王子さまの所に行つて、大きな声で言うのだ。

「バカあ——！」

こうして王子さまとお姫さまは、幸せにくらしましたとさ。

ふふつ。

こういう展開でハッピーエンドを迎えるのも面白いと思わない？

「早くしなさいよ。じゃないと、置いてくからねえ——！」

「ええっ」

困惑した顔の優一に構わず、わたしは思いっきり駆け出していく。後ろから、文句を言いながらも走ってくる足音が聞こえた。

季節は、夏の暑さも本番へと入り始めたころ。

気持ちがすつきりして、今のわたしには朝の空気がすごく澄んで
いるような、そんな気がした。

くおわりく

↳ Sleeping Princess . . . ↳ 11 (終) (後書き)

ここまで読んでくださりありがとうございました。このお話はここで一旦、終わりとなります。それではまた、次のお話でお会いできましたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1880q/>

Sleeping Princess...

2011年10月6日23時36分発行